

# 会 議 録

## 1 会議名

安塚区地域協議会地域の課題検討分科会（A）

## 2 議題（公開・非公開の別）

### （1）報 告（公開）

① 12月12日に発生した樽田地区雪だるま物産館脇の雪室の火災について

### （2）協 議（公開）

① 町内会長・自治会長との意見交換会から見えてくる地域活動（主にイベント）  
について

### （3）その他（公開）

## 3 開催日時

平成29年12月12日（火）午後6時から午後7時45分まで

## 4 開催場所

安塚区総合事務所3階301会議室

## 5 傍聴人の数

0人

## 6 非公開の理由

—

## 7 出席した者（傍聴人を除く。）の氏名（敬称略）

・ 委 員： 数井憲一（会長）、中村真二、長谷川直樹、秦克博、  
松苗正二（分科会長）、松野等

・ 事務局： 山崎所長、國保班長、高島主事

## 8 発言の内容（要旨）

### 【國保班長】

- ・ 会議の開会を宣言
- ・ 上越市地域自治区の設置に関する条例第8条第2項の規定及び内規に準じて分科会を開催することを確認
- ・ 委員の半数以上の出席を確認、会議の成立を報告

・会議の進行及び会議録の確認：松苗正二分科会長

**【國保班長】**

協議の前に、本日発生した樽田地区の火災について事務局から報告させていただく。

**【山崎所長】**

・12月12日に発生した樽田地区雪だるま物産館脇の雪室火災について報告

**【國保班長】**

報告は以上である。協議をお願いします。

**【松苗正二分科会長】**

先般、第8回地域協議会において、町内会長等との意見交換会で出た地域の課題について、分科会を組織して課題を整理し、分科会ごとに地域協議会で協議すべき内容を検討すると決定したことから、次第に沿って協議を進めていく。

まず、「1 町内会長・自治会長との意見交換会から見えてくる地域活動（主にイベント）を行う上での課題について」を協議する。意見交換会では、地域活動を行う上での人員不足について意見交換したが、集落からは主にイベントの運営について発言があった。集落によってイベントの内容や状況は違うが、人手不足を解消するためにはどういった方法があるのかなど意見をお聞きしたい。

**【松野等委員】**

イベントを実施する上で大切なことは、どこの集落もやっているからやるという固定観念ではなく、各集落それぞれが創意工夫して取り組むことであると考えている。灯の回廊を例に話すと、私の集落では、雪像を小さくしたり売り物を減らしたりするほか、交通誘導員は専門員を雇うなどして、なるべく自分たちに負担がかからないようにしている。また、イベントを継続するためには、売上も大事であるが、翌日に疲労を残さず、地域で楽しむことも重要である。私の集落では、イベント従事が午後8時頃には終わるよう、売り物を調整して作っているし、楽しみの1つとして慰労会を実施しているためか、次の日に疲れはそれほど残らない。地域ごとに創意工夫するということは、それが地域らしさにもなるため、必要なことであると思う。

**【秦克博委員】**

私の集落では、春まつりの際、神輿の担ぎ手が不足しているが、区内の事業所や官公庁等に担ぎ手を出していただくようお願いしてなんとか実施している。イベントを継続

していくためには、集落にとどまらず、協力していただける方には、最大限協力していただいで実施していくしかないのではないかと。

また、松野委員が言うように規模を縮小するというのも大事である。イベントをやめてしまうことは簡単だが、1度やめてしまってからまた始めるというのはなかなか難しい。できる範囲で継続していくことが望ましいと考える。

#### 【中村真二委員】

イベントを実施すること自体が目的となっている気がするので、何を目的としてイベントを実施するのかを考える必要がある。ボランティアが集まってイベントを実施できたとしても、集落の人たちが体力的に運営できなくなれば、そのイベントは終わってしまう。その先を集落や町内会単位で考えていかなければならないのではないかと。

#### 【長谷川直樹委員】

私は、イベントを実施する目的は、地域の活性化であると思う。

イベントを実施する上では、主導者やイベントを動かす人員が必要である。先ほど秦委員からも話があったが、私たちの集落では、毎年、春まつりを実施しており、その際の神輿の担ぎ手不足が問題となっている。20年程前は、若者は仕事を休んでまつりに参加していたが、現在は働く環境が多様化しており、若者が集落の活動に参加することは難しくなった。そのため、町内会長は、区内の事業所等へ文書ではなく、直接出向いてまつりへの協力をお願いすることで、なんとか人数を確保することができている。意見交換会で発言された会長からは、私の集落の会長と同じく、強いリーダーシップを感じた。そういった集落はまとまっている。イベントの後継者がいないということが問題であるが、できるうちは集落でやるべきだと思う。そして、イベントを継続したいという意思があるのであれば、集落を超えて、地域で協力しあうべきだと考える。例えば、安塚地域、おぐる地域、菱里地域といった安塚町に合併する前の村単位で協力したらどうか。現在、おぐる地域8集落では農山漁村振興交付金を活用して、おぐる地域活性化協議会を組織し、様々な取組を実施している。また、安塚地域では、直峰城跡保存会を組織して、集落から1名ずつ輩出し、直峰城跡登山道の草刈りや風間祭というイベントの開催など直峰城跡の保存に関連した活動を行っている。会長同士で集まって、地域または区内で協力体制を築くことができれば良いと思う。

#### 【數井憲一委員】

意見交換会で出た各地域の課題をどうしたら良いか考えた時に、長谷川委員の発言にもあったが、おぐろ地域のように隣の集落等と一緒に活動するというのも1つの手だと思う。また、区外等にボランティアをお願いするというのも考えられるが、この場合、ボランティアを本当に作業従事だけで帰らせてしまって良いのかというところが悩みどころである。ただ、ボランティアに来てもらうだけではなく、住民とボランティアが互いに楽しんで交流することが大事であり、そのためには、集落の受入体制が重要である。

意見交換会の時におぐろ町内会の八木会長が、地域活動の継続には、見返りや報酬も必要であると言っていたが、それは、おぐろ地域活性化協議会の活動における話であり、地域イベントでは難しいのではないかと。

人手不足についての問題は難しく、集落によって活動の内容や考え方も異なるので、結論はなかなか出ないだろう。地域協議会としては、地域の課題を浮き彫りにした後、その課題に対しての解決策を検討していきたい。そして、検討した解決策を意見交換会等で地域等に提示し、各集落が各集落にあった対応をしていってもらえれば良いのではないかと考えている。今日は、皆さんからいろいろと意見を出していただき、その中から良いものを採用して、安塚区地域協議会全体会や町内会長等との意見交換会につなげていきたい。

#### 【松苗正二分科会長】

人手不足については、日本中で起きており、数井委員が言われたように難しい問題ではあるが、皆さんと協議していきたい。

私も1つ意見を述べさせていただく。10月19日に柏崎市高柳町荻ノ島集落へ行ってきた。荻ノ島集落では、制度の詳細は思い出せないが、ある制度を活用して、若者を数人受け入れていたため、高齢化率が高い集落であるが、若者も加わって様々なイベントを実施していた。また、荻ノ島集落は、集落全員が協力して集落を守っているという印象であった。例えば、誰かが稲を刈っている時に雨が降りそうになれば、頼まなくても集落の何人かが集まって稲刈りを手伝ってくれるという。こういった協力体制は、構築しようといっただけですぐにできるものではないが、独り身の高齢者でもこういった協力体制があれば暮らしやすいと感じた。

また、数井委員から、イベントに来てもらったボランティアをそのまま帰らせてしまって良いのかという意見があったが、私は、イベントの時だけではなく、好きな時に集

落に来てもらい、集落に溶け込んでもらえるような関係性を築くための方策が必要と考える。そのためには、外から来た人との交流が大事であり、イベント従事といった作業だけでなく、飲み会への参加など集落外に住んでいても地元の間人と同じような感覚でいてもらうことが重要である。

**【數井憲一委員】**

要するに、イベントだけではなく、草刈りやお茶のみなどにも気軽に顔を出してもらえるような関係ということか。

**【松苗正二分科会長】**

そうである。集落にいればやらなければならないことはたくさんある。顔を出してくれば、今言われたような草刈りや山での仕事を手伝ってもらえることができるので、年間を通して付き合える関係性が望ましい。しかし、そのためには集落の受入体制が重要である。行政にも考えていただきながら、受入れの窓口をどこにするか等も含めて協議していけたら良いと考える。

**【長谷川直樹委員】**

細野町内会は、年間を通して高崎経済大学の学生と交流している。学生は、米作り体験や畑の収穫体験に加えて、灯の回廊の手伝いもしている。細野町内会の会場のキャンドルは、壮大で立派なものであり、学生の協力がなければあれだけのものはできないだろう。

**【松苗正二分科会長】**

特定の企業や学校等と細野町内会のような関係性を築けたら理想的である。

**【長谷川直樹委員】**

伏野自治会のそばまつりは、上越信用金庫職員、看護大生や市の調理員がボランティアとして来ていると聞いた。ボランティア従事後、そばを食べることができるという楽しみがあるからということもあると思うが、そもそも、上越信用金庫等がそばまつりのボランティアに参加するようになった理由は何なのか。

**【國保班長】**

市の中山間地域支え隊事業という、集落や地区において地域行事や共同作業を行う際、人手が不足する場合、企業・団体からボランティアを派遣する事業がある。市としては、集落と団体等の関係がイベント時のボランティアとしてだけでなく、違った形の付き合

いにも発展してほしいという狙いがあるため、もちろん、団体等から申込みがあることが前提であるが、なるべく同じ集落と団体等をセッティングするようにしている。当事業は3年目であるが、上越信用金庫は3年間とも伏野のそばまつりに参加している。

**【松苗正二分科会長】**

その事業は、企業等に市で周知しているのか。

**【國保班長】**

企業に直接お願いしに行くなどして周知している。企業も地域貢献ということで、ボランティア活動の希望がある。上越信用金庫は、先日の伏野そばまつりでは、のぼり旗を作って参加するなど一生懸命取り組んでいる様子である。

**【松野等委員】**

企業のPRにもなるので、双方に利益があって良いと思う。

**【松苗正二分科会長】**

その取組は全市的なものであるから、なかなか安塚等には来てくれないのではないかと。

**【國保班長】**

内容による。そばまつりは、従事後のそばを楽しみにしている方も多く、今回もたくさんのボランティアスタッフが集まった。そういったボランティアの楽しみの要素をイベントに加えることも重要である。

**【松苗正二分科会長】**

そばまつりのような、従事後にそばを食べることができる、慰労会の要素も含んだイベントは良いが、ほかのボランティアの場合は、先ほど数井委員の話でもあったが、せっかく来てくれたということで、慰労会等を催す場合、その準備に集落の人が苦勞してしまう。たくさんのボランティアを集めるためには、ボランティアの方の楽しみの要素等どういった形でイベント等を実施していくのかについても検討していくべきである。

**【國保班長】**

中山間地域支え隊事業は、ボランティアへの食事提供等見返りを必須としていない。ボランティアということもあり、基本、食事は各自で用意していただくが、伏野集落の方は、わざわざ伏野まで来てくれたということで、そばを提供している。

**【松苗正二分科会長】**

今、様々な意見をいただいた。意見交換会でも意見があったが、委員の皆さんからも

地域イベントは1度やめてしまったら復活が難しいこともあり、縮小してでも続けていった方が良くというような趣旨の意見が多かった。集落を維持していく限りは、地域を守るためにも、イベントをできるだけ続けていった方が良くということだが、人員不足の中、どういった方法でイベントを継続していくのか地域協議会で検討していきたいと思う。

**【數井憲一委員】**

先ほど、中村委員は、イベントを実施する目的を集落で考えなければならないと言っていたが、どういうことか。

**【中村真二委員】**

イベントを実施して、ボランティアが来てくれたとしても、結局、今集落にいる人たちが体力的に厳しくなればイベントを継続できない。そして、イベントだけでなく集落を維持することもできなくなっていくため、集落外の人と交流しながら、移住者等ここに住む人を取り込んでいくという目標を立てる必要があると考える。先ほど、細野町内会が大学生と交流しているという話があったが、もし、その中から移住者が出れば大成功である。

**【松苗正二分科会長】**

要するに、イベントを単に祭りとしての位置付けではなく、人を住まわせるためのものと位置付けて考えるべきということか。

**【中村真二委員】**

もちろん、祭りといった位置づけとして、集落の人たちが元気になってくれることも大事なことだと思うが、その先の移住者の取り込みについて考えることも重要だと思う。

**【數井憲一委員】**

十日町市松代で開催されている大地の芸術祭が素晴らしいということで、実際に松代に移住してきた家族がいるという。旦那さんの職業は分からないが、移住して来てから奥さんは十日町市の臨時職員として働いているという。移住しても仕事がなければ生活していけない。先ほども言ったが、イベントで人を引き付けるのも大事だが、地元で受入体制を整えておかなければならない。

**【長谷川直樹委員】**

十日町市の竹所集落は、移住してきたカールベックス氏が手掛けた古民家に住みたく

て移住して来る人が多いが、移住者たちは、自分たちで仕事を見つけてくるらしい。

**【數井憲一委員】**

十日町市の池谷集落などの話を聞くと、若い人が移住してくるため、平均年齢は下がるが、もともと池谷集落に住んでいる人たちの家族は戻って来ないそうだ。

**【中村真二委員】**

ずっと地元において田舎の弱点を知り尽くしていて、外に出たいと思う人もいるだろうし、私もそうであるが、都会の生活に疲れて田舎に住みたいという人もいる。出て行ってしまう人はしょうがないと思うので、この地の良さを新しく発見してくれる人に来てもらえれば良いのではないか。

**【長谷川直樹委員】**

山の暮らしの場合、雪を嫌がる人が多いが、竹所集落のカールベックス氏は雪が降ると大変喜んでいるそうだ。

**【數井憲一委員】**

安塚も昔より雪は降らなくなったが、高田や直江津に比べて、山は雪がたくさん降るから大変ではないか。

**【中村真二委員】**

私もそうだが、山の暮らしが好きな人もいると思う。

**【松苗正二分科会長】**

私も子供の頃は雪が嫌だったが、今は除雪機も除雪体制もしっかりしているため、全然苦にならない。

長谷川委員から先ほど意見があったが、イベント等の際は他の町内会から協力していただくという面も検討していくべきだと感じた。先ほど、安塚地域として直峰城跡保存会を組織しているとあったが、いつから活動しているのか。

**【長谷川直樹委員】**

直峰城跡保存会がいつから活動しているか正確には分からないが、だいぶ前から活動していると思う。ほかにも、安塚には特別養護老人ホームあいれふとグループホーム安塚やすらぎ荘の2つの介護施設があることから、安塚地域の9集落で福祉応援隊というものを組織している。前の町内会長の時に、介護施設が安塚に2つあるため、地域として何か協力できないかということで、福祉応援隊を組織し、年3回施設周辺の草刈りを



するようになった。こういった安塚地域としてのつながりをほかの活動等にも活用していければ良いと思う。

直峰城跡保存会が開催する風間祭についても、実際、安塚町内会が大半の運営をしており、その他の集落は、首長が参加しているだけであるため、関わり方も改善していけたら良いと思っている。

**【數井憲一委員】**

風間祭ということで直峰城跡保存会だけで実施しているから参加者が限られるのではないか。区内の他団体等と連携して行ったらどうか。

**【長谷川直樹委員】**

初代直峰城主の風間信濃守信昭公を称える風間会という組織が長野県や新潟県にあり、今年、安塚で集まった。また、風間信濃守信昭公が横浜市妙法寺を開基したと伝えられていることから、妙法寺の子供たちと安塚町内会の子供たちとで交流事業を実施している。ほかにも、最後の直峰城主である樋口兼豊が山形県米沢市に移り住んだことから、米沢市の直峰町とも20年程前から親交がある。今挙げた方々は、風間祭にも来場していただいております、こういった地域外とのつながりは現在も継続している。私たちが今できることは最大限実施しているつもりである。

**【數井憲一委員】**

あとは情報発信が必要だ。市には観光振興課、上越観光コンベンション協会がある。各区においてもいろいろと行事があるので、そういった組織が区の行事にも関与してくれたら良いのではないかと。

**【中村真二委員】**

観光コンベンション協会は、旧上越市の範囲でしか活動しないと聞いた。

**【數井憲一委員】**

観光事業は、旧上越市だけ一生懸命取り組んでいるように感じる。もっと全市的に取り組んでいただきたい。

**【國保班長】**

合併当初、旧上越市で実施しているイベントが大きいと、各総合事務所職員にも動員依頼があったが、各区においてもそれぞれイベントがあることから、現在、イベントは、旧上越市は木田にある事務所で、各区は総合事務所で対応することとなっている。

### 【數井憲一委員】

灯の回廊の時等、市はポスターを作成して集客のためのPRはしてくれるが、運営する地元の人たちの手助けはしてくれないので、そういった方法を考えてくれれば良いのだが。

### 【高島主事】

今の話に関連して、先日、今日の分科会の事前打合せをした際に、これまで行政が地域の人手不足に対してどういった対応をしてきたのかという話があったので、簡単に説明する。

安塚町では、昭和30年の町村合併時には人口が約11,000人いたが、昭和50年代半ばから人口が半数以下になる過疎化に悩まされていた。高度経済成長による産業構造の変化により、若者は外に出て、住民からは嘆きやぼやきしか出ない悪循環に陥っていたため、町では、住民の自信の回復を目指し、町民に呼びかけまちづくりに取り組んでいた。

- ・安塚町におけるまちづくりの取組を紹介

また、現在は、先ほど、國保班長から説明があった中山間地域支え隊事業のほか、直接、人手不足に対する事業ではないが、福祉面での地域を支える事業や除雪に対する支援制度があるので、簡単に紹介する。

- ・現在の市においての各種関連事業を紹介

### 【松苗正二分科会長】

今、説明のあった平成11年から始まった越後田舎体験事業についてだが、これは今も続いており、この地を楽しんで帰る参加者はきっとたくさんいると思う。田舎体験が終わった後、参加者に対して礼状等は送付しているのかもしれないが、そのほかは何もしていないのではないか。田舎体験の参加者にこちらのイベント情報等を発信してまた遊びに訪れてもらえたら良いと思う。

### 【國保班長】

田舎体験は、学校単位で参加しており、ほとんどの学校が1泊していただけなので、1泊の間にどれだけ濃密な関係を築けるかにかかっている。さらに、最近は、個人情報関係で児童の情報が開示されてこないのも、もちろん、児童が直接教えてくれれば良いが、個々に連絡をとるのは難しい状況である。当初は、田舎体験を契機として、農産物等の販

売をできる関係を築きたいという狙いもあったそうだが、なかなか難しく、そこまで至っていない。中には、参加者との関係が続いており、大学を卒業して就職をしたという近況報告の手紙をもらったり、家族ぐるみで再び訪れて来てくれたりといった付き合いをしている方もいる。

**【松苗正二分科会長】**

それは個人的な付き合いなので、この地域に住みたいとか、この地域の事業等に協力したいという方向にはならない。

私は、参加した子供たちが大人になってから田舎体験で訪れた地を振り返ることがあっていいと思う。田舎体験に参加した子供たちがもう1度来てくれる形にもっていければ、この地域に対してさらに魅力を感じられることができるのではないかと。

**【國保班長】**

学校側は、宿泊施設への宿泊ではなく、一般の家庭に宿泊する民泊を望んでいる。安塚区においては、民泊を最盛期で300人程受け入れていたが、これまで受け入れてくれた方々の高齢化もあり、今は100人を受け入れられない状況である。受入先を探しているが、なかなか開拓できていない。

**【松苗正二分科会長】**

人の子を預かるわけであり、大変気を使うことなので、受入先がなかなか見つからないということはしょうがないことではないかと。むしろ、私は、現在100人近く受け入れていることがすごいことだと思う。多くの人数を受け入れるというよりも、参加者にまた安塚区に訪れてもらえるよう情報を発信していく必要がある。

**【國保班長】**

参加した時にまた来たいと思ってもらえる仕掛けも必要である。安塚区での話ではないが、田舎体験は作業ばかりしていたという感想の子供たちもいるようで各受入家庭によって対応が様々である。また、逆に安塚区の人参加者を歓迎しすぎて疲れてしまう傾向にあり、子供たちの対応に疲れて、もう受け入れはできないとなってしまう家庭もある。

**【數井憲一委員】**

私も田舎体験の受け入れをしたことがあり、礼状が学校から送られてきたことがあるが、児童の個人名等は載っていなかった。たまに受け入れた児童の親から菓子折りが送られ

てくるが、まず住所は分からない。

**【松苗正二分科会長】**

田舎体験の参加者だけでなく、先ほど中村委員が言ったようにイベントに参加してくれた人たちを地域に定着させるということも重要である。そのためには、まず、どういった方法でこの地域に人を呼び込むことができるかを考えなければならないが、やはり、それには情報の発信がないと難しい。

**【中村真二委員】**

情報発信こそ行政と民間が協力していかなければならないのではないかと。上越市全体で協力していかないとほかの地域には勝てない。来た人を定着させるのは地元の人たちの役目であると思うが、情報発信は行政と移住者募集团体等が力を合わせて行うべきである。移住について、新潟県は力を入れているように感じるので、上越市も県が取り組んでいることに便乗する形で力を入れていけば良いのではないかと。

**【長谷川直樹委員】**

イベントを実施しても、発信力がなければ、結局、参加者は集落内や隣の集落の人のみになってしまう。区外や市外から来てもらって、最終的に、ここに住んでみようかと思ってもらえれば良いのだが。

**【數井憲一委員】**

3年程前、朱鷺メッセの展望台に行った際、多くの自治体のパンフレットが置いてある中、上越市のパンフレットはなかった。そもそも安塚区のパンフレットはないと思うが、作成したらどうか。

**【國保班長】**

観光パンフレットは、合併後、上越市で統一するという方針があったため、安塚区独自のパンフレットはない。

**【松野等委員】**

それこそ、地域活動支援事業を活用して安塚区のパンフレットを作成すれば良いのではないかと。

**【數井憲一委員】**

ただ、その場合、1つの集落が提案して作るというのではなく、町内会長協議会と

いった安塚区全体で実施するものである。そもそも、安塚区では、地域活動支援事業の下限を5万円としているが、5万円程の少額な事業で本当に地域活性化になるのか。安塚区全体といった規模で、ある程度規模の大きい事業を長い目で展開していくべきだと考える。

**【中村真二委員】**

安塚区の単位で事業を実施するとしたら、地域を元気にするための必要な提案事業というものがあつたが、活用することは可能なのか。

**【高島主事】**

地域を元気にするための必要な提案事業とは、地域の皆さんが課題解決に向けて地域としてできることを具体的に考えて、事業提案書を提出していただき、市が予算化を検討するものである。それにのっとっていただければ可能である。

**【中村真二委員】**

例えば、安塚区を外に発信する事業ということで行動したらどうか。

**【數井憲一委員】**

なかなか結論が出ないが、次第の協議事項の「2 地域協議会委員の考える地域活動（集落の維持）を行う上での課題について」に進まなくて良いのか。

**【松野等委員】**

分科会としての考えは来年の2月までにまとめるということであつた。分科会は今日が第1回目であり、今日でまとまるとは思えない。

**【松苗正二分科会長】**

それでは、協議はここまでとし、続きは次回とするか。

これまで、イベント等の情報発信について話してきた。情報発信に関連して、この間、上越市のふるさと納税に寄付をした人へのお礼の品を見てがっかりした。集落の人との話でも、私たちの小黒集落に寄付をしていただいた方がより良い物をお礼に送ることができると話していた。私たちの地域には魅力的な物がたくさんあるので、地域でふるさと納税的なものをできれば、地域のPRにもつながって良いのではないかと感じた。

**【數井憲一委員】**

それはおもしろい。安塚区であれば、米を送っても良いのではないか。寄付のお礼に安

塚区の物産品を送ったことを契機に地元の産業が潤えば良い。

**【中村真二委員】**

ふるさと納税というやり方は、できないかもしれないが、クラウドファンディングのような考え方で、安塚で何かをするので寄付をしていただき、物産品を送るということは可能ではないか。

**【松苗正二分科会長】**

クラウドファンディングは、企業が実施しているかと思うが、そうした場合、ただ単純に集落等に寄付をしていただくのではなくて、実際に何かをして、成果品を残さないといけないものか。

**【中村真二委員】**

そうである。

**【松苗正二分科会長】**

どちらにせよ、やはり、情報発信するといっても相手が魅力を感じられるものでないと受け入れてもらえない。

**【數井憲一委員】**

一つの例だが、ボランティアに来た人にキューピットバレイスキー場の1日券を1,000円程で提供するというのはどうか。やはり、安塚区は雪が魅力であり、雪を前面に宣伝した方が良いのではないか。

**【松苗正二分科会長】**

キューピットバレイスキー場が承諾してくれれば可能かと思う。

**【松苗正二分科会長】**

そろそろ時間である。いろいろと意見をいただいたが、まとめると、今後の集落を維持していくためには、地域イベントの目的を明確にして、10年、20年先の集落を見据えることが重要であり、そのためには、情報発信をして人を呼び込まなければならないということであった。

そうしたことから、今回は、どのようにして情報を発信して人を呼び込んでいくかを検討したい。今、言われたようなクラウドファンディングやSNSを使った情報発信など様々な方法がある。各自検討課題とし、次回の分科会で協議したい。それを煮詰めて私たちの分科会の意見としたらどうか。

**【長谷川直樹委員】**

情報発信について協議することも良いが、検討課題にもう1つ加えていただきたい。意見交換会の時に朴の木自治会は、13戸という少ない人数ながら、棚田への柳葉ひまわりの植栽や棚田カフェの取組を集落で頑張っていると話があったので、そういった集落への協力体制についても検討したらどうか。高齢化して人員が不足しているが、頑張ろうと努力している地域については、地域活動支援事業で補助金を支出するだけでなく、区全体としてバックアップできないか検討していきたい。

**【數井憲一委員】**

朴の木自治会については、小・中学校が柳葉ひまわりの植栽や当日の運営を協力しているほか、中村委員も関わって、今回、棚田カフェ当日にミニコンサートを開催していたので、すでに協力体制は十分ではないか。

**【松苗正二分科会長】**

今回、朴の木自治会は、ボランティアを募集したが、集まらなかったとあった。そのボランティアを地域でバックアップする仕組みを検討するのは良いことだと思う。長谷川委員が挙げた朴の木自治会の問題は、柳葉ひまわりの植栽や管理のことか。

**【長谷川直樹委員】**

そうである。

私の意見の趣旨としては、人員が少ないながら頑張っている人たちを地域全体で応援していきたいということである。

**【數井憲一委員】**

確かに、朴の木自治会は、次は田んぼの畦畔に柳葉ひまわりを植えたいと言っていたので、その辺を応援できたら良いと思う。

**【松苗正二分科会長】**

朴の木自治会と同じく、行野自治会も戸数が少ない集落であるが、毎年、横尾義智記念館において全国各地のろうあ者との交流会を開催している。交流会は私も関わらせていただいているが、とても素晴らしいイベントであった。ボランティアで横尾義智記念館周辺の草刈りや清掃の協力を募り、安塚の一大イベントとして盛り上げることができたら良いと感じる。年々、行野自治会の人と交流会に参加するろうあ者が減っているが、全国各地からたくさん集まってもらえる交流会になると良い。

それでは、次回の検討分科会では、①「地域に人を呼び込むための情報発信の方法」及び②「人手が足りていない集落への協力体制」について協議することとしてよいか。

(「はい」の声あり)

次回までに、2つの議題について、各委員の考えをまとめてきていただきたい。

以上で本日の協議を終了する。

**【松苗正二分科会長】**

- ・次回地域協議会開催日（1月19日）を確認
- ・会議の閉会を宣言

9 問合せ先

安塚区総合事務所総務・地域振興グループ TEL：025-592-2003（内線23）

E-mail：yasuzuka-ku@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料も併せて御覧ください。